

新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育
サポートセンターだより

も え ぎ

第 112 号
令和 3 年 7 月 6 日
新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育サポートセンター
新潟市中央区西大畑町458番地1



日々、子どもに寄り添う！

特別支援教育サポートセンター
所長補佐 加藤 智美

娘が小学校6年生の時の出来事です。「娘さんが、友達に暴力を振るって、学校から飛び出して行方が分からなくなりました。」と、学校から連絡が入りました。すぐに職場を後にし、娘を探しました。娘は、祖父母宅の車庫に泣きながら身を隠していました。祖母が見つけた、「ずっと出てこないよ、お母さんが悲しむよ。」という声かけで、出てきたそうです。職場を出て、見つかったという知らせが入るまでの間、私の目に涙がたまっていたことを覚えています。

学校を飛び出してしまった原因は、友達とのトラブルでした。図工の作品作りの材料を「(友達)いらなくなったから返す。」「(我娘)返さないでほしい。」という言い合いでした。娘にはどうしても返してほしくない理由がありました。しかし、その理由を相手にうまく伝えることができませんでした。そして、敵わない相手にパンチをして腹立たしさを表してしまいました。

人は欲求が満たされている状態の時は、心も行動も生活も安定しています。しかし、人は欲求が満たされない状態が続くとどのような状態になるので

しょう。欲求が満たされない気持ちが募り、言葉で表現できずに爆発すると、物や人に当たることで表現します。娘がしてしまった暴力で訴える行動がそれにあたります。この行動が繰り返されると、子どもは自分のことを大切にしくなっていくます。また、自分の欲求が満たされず、自分の気持ちを抑えてしまうと、娘のように車庫に隠れる・閉じこもる行動に出ます。この行動が積み重なると、人とかかわることが怖くなっていきます。

子どもの喧嘩に親は口出しせずに、子どもが自分の力で解決できることが理想です。しかし、「いや」という自分の意思をさわやかに伝えたり、言葉にしていい返す(やり返す)力が付いていない子どももいます。「いやなことをいや」「嬉しいことを嬉しい」と伝えるなど、コミュニケーションの力が育って欲しいと思います。

先日、人の親になった娘に当時の様子を尋ねました。「お母さんが、相手の親に謝ってくれている姿をよく覚えている。そして、その時は全然納得なんてしていなかった・・・。自分の子どもが私と同じことをしたら、やはりお母さんと同じようにするよ。」と話してくれました。当時の様子を明るく振り返るまでになってくれた娘(母)を感じました。



令和3年度「教育相談研究会」のお知らせ

近年、当センターでは、「児童生徒理解・教育支援シート」、「連携」をテーマとして研究に取り組んでまいりました。例年、教育相談センターや各区教育相談室の主訴の8割を超えているのが不登校です。

昨年度は、教育相談、適応指導教室の他に、特別支援教育の分科会を新たに設定しました。『子どもの自立につながる確かな連携』を副題とし、センター内はもちろん、学校や他機関とどのようにつながり、連携していくとよいかについて具体的な事例を挙げながら提案させていただきました。

今年度も、昨年度同様3つの分科会を予定し、よりよい連携の方策について提案させていただきたいと考えています。右記のように開催する予定です。ぜひご参加いただき、忌憚のないご意見をお聞かせくださいますようよろしくお願いいたします。

<開催日時> 令和3年11月24日(水)
15時00分～16時30分

<会場> 新潟市教育相談センター

<各分科会アドバイザー>

佐藤 亨 様 新潟青陵大学 教授
田中 恒彦 様 新潟大学 准教授
長澤 正樹 様 新潟大学 教授

詳細につきましては、9月上旬にメール配信をいたします。添付されています申込書にご記入いただき、お申し込みください。

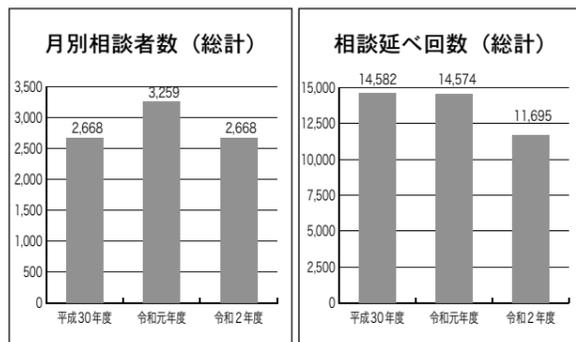
*なお、新型コロナウイルス感染症にかかり、直前の中止等変更があり得ることをご承知おきください。

令和2年度 相談集計特集

～教育相談センター～

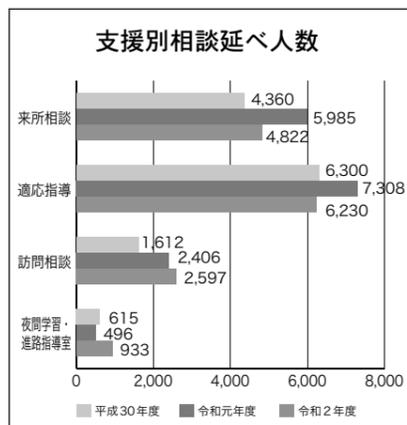
教育相談センターと各区(北, 江南, 秋葉, 南, 西蒲)教育相談室では, 児童生徒及び保護者への相談支援として「来所相談」, 「適応指導教室」, 「訪問教育相談」, 「夜間『学習・進路相談室』」, 「いじめSOS電話相談」を行っています。この度, 令和2年度の相談状況がまとまりましたのでお伝えします。

1 相談支援 月相談者数 平均 222 人



グラフは, 相談センターと各区教育相談室 (5室) で, 相談支援を受けた方の延べ総数と延べ回数になります。コロナ感染症拡大による休校措置の影響で, どちらも元年度より件数は若干減っていますが, 月平均222人が相談支援を受けたことが分かります。延べ回数から, 解決の見通しをもつまでに, 平均4回程度の相談利用があることが分かります。

2 適応指導教室・夜間学習進路相談室の積極的活用



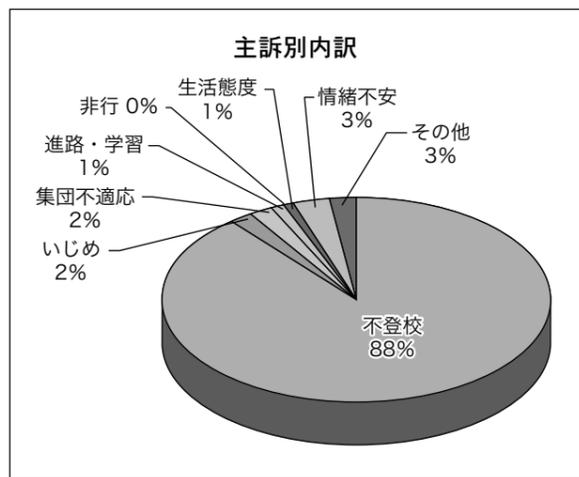
グラフは, 支援形態別に, 相談支援を利用した人数の経年変化を表しています。「夜間学習・進路相談室」は相談センターだけの支援になりますが, 「来所

相談」「適応指導」「訪問相談」は相談センター及び各区相談室で行っています。

適応指導や夜間学習・進路相談室は, 進学や登校再開に向けて, 心のエネルギーを充電している子どもたちが利用しています。本人の希望により週に複数回利用することができます。コロナ禍であっても, 適応指導教室は一昨年度並みの利用があり, 夜間学習・進路相談室にあっては利用回数が増加しました。

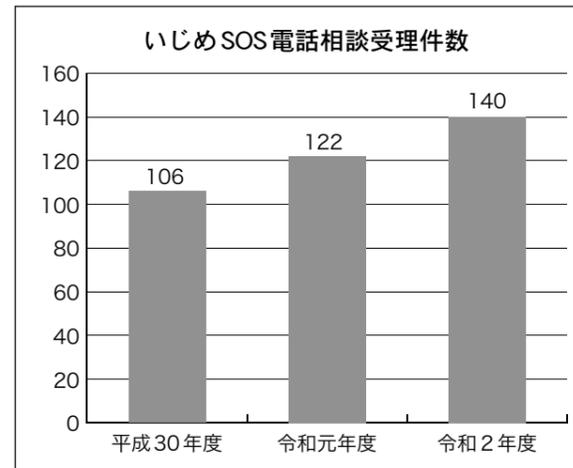
訪問教育相談の利用はやや減少傾向にあります。15名の相談員が区の垣根を超えて毎日対応しています。

3 相談主訴 約9割が「不登校」



「主訴」とは, 相談者の抱える複数の訴えの中で, 最も中心的な訴えのことです。主訴の中で最も多くの割合を占めるのは「不登校」です。27年度では73%でしたが, 30年度は87%で過去最高となりました。令和元年度は85%と幾分下がりましたが, 令和2年度は88%となり過去最高を更新しました。全国的にも, 小・中学校の不登校児童生徒数が平成25年度から増加に転じて高水準で推移していた上に, コロナ禍での影響もあるのか, さらなる増加が心配されます。不登校といってもその要因は, 友人関係, 集団不適応, 進路・学業, 家庭環境・親子関係, 学校不信など様々です。継続した相談を重ねながら, 相談者の思いを丁寧に聴き取るなど, 個々に寄り添った相談・支援が一層求められています。

4 いじめSOS電話相談件数はさらに増加



相談センターや各区教育相談室では, 原則として, 一般電話相談は行っていません。相談は来所相談が原則です。

しかし, 来所相談を受け付けるにあたり, 相談の内容を把握するために, 電話による一般電話相談も実施しています。また, 全国的に実施されている「いじめSOS電話相談」も当センターで担っています。受理件数は, 年間100件を超え, 令和2年度では, 前年度を上回り, さらに増加しました。

* * *

「相談集計」に基づいた経年変化や傾向を把握するとともに, 日々の教育相談を通じた「主観的な見取り」と照らし合わせながら, 当センターが教育のセーフティーネット機関として, 市民や関係機関から一層信頼され安心して利用されるよう, 業務評価や業務改善を進めていきたいと考えています。

～特別支援教育サポートセンター～

当センターが行う支援活動は, 電話相談, 学校訪問, 学校関係者との面談, 保護者との面談, 研修会講師, 発達検査実施・報告, 支援会議参加などです。図1にて支援件数の推移を示します。

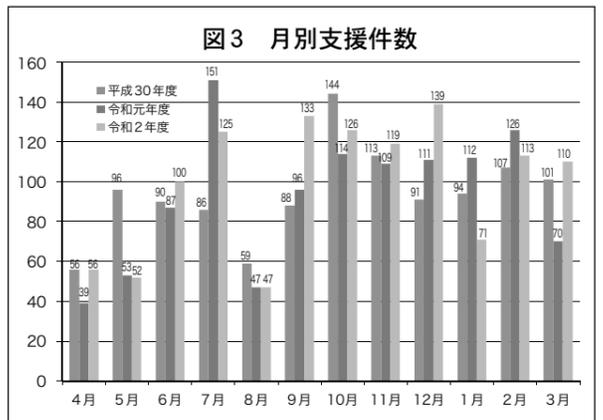
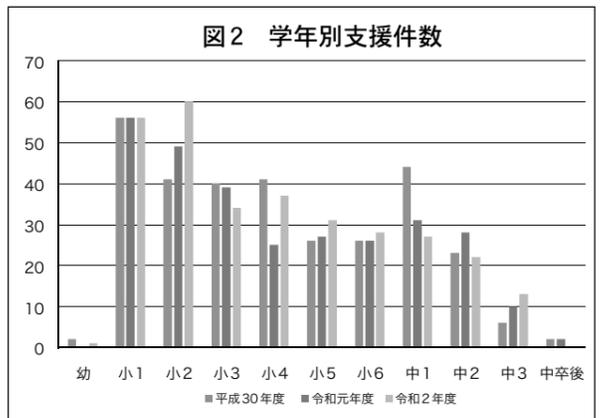
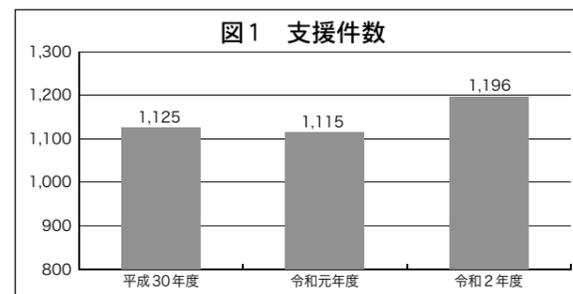
令和2年度はコロナ禍での支援活動となりました。1200件ほどの支援数となりました。

学年別の支援件数を図2にて示します。

特徴は, 小学2年生への支援数が増加していること, 小学生への支援数が増えていること, 中学1, 2年生への支援数が減少している一方で, 3年生への支援数が増えていることです。

月別支援件数を図3にて示します。

特徴は, 休校中の4月に支援件数が増加したこと, 9月, 12月, 3月の支援数が増加した一方で, 1月の支援数が減少したことです。



大学・市教委連携教育相談事業

担当 教育相談部 副主任 丸山 一仁

当センター・各区教育相談室への来所者の方々と職員のために、新潟大学と新潟青陵大学の先生方からご協力をいただいている「大学・市教委連携教育相談事業」は、38年目を迎えました。

今年度も、教育相談、事例研究会、講義などで、臨床心理、医療、特別支援教育と、それぞれ専門的なお立場からご指導やご助言をいただき、当センターの支援活動に活かしていくように、私たち職員一同、努めてまいります。

～ご協力いただいている大学の先生方～

<新潟大学>

- ・教授 横山 知行 先生
- ・教授 長澤 正樹 先生
- ・教授 神村 栄一 先生
- ・教授 有川 宏幸 先生
- ・准教授 田中 恒彦 先生
- ・准教授 入山満恵子 先生
- ・准教授 佐藤 友哉 先生

<新潟青陵大学>

- ・教授 伊藤真理子 先生
- ・教授 佐藤 亨 先生
- ・准教授 浅田 剛正 先生
- ・助教 小林 智 先生
- ・助教 小林 大介 先生



訪問教育相談の活用

訪問教育相談部主任 齊川 豊

「そこに置いたら、僕が勝っちゃうよ。いいの？」これは、訪問児童と訪問相談員とのオセロゲームの一コマです。幼いながらも訪問相談員を気遣う優しさに、つい顔をほころばせてしまいました。

訪問相談では、特にこれをしなければならぬというものはありません。ゲームでも学習でも本人がやりたいと思うことを一緒にやりながら、少しでもエネルギーが蓄えられるよう支援していきます。

学校になかなか行けない子ども、部屋に閉じこもりがちの子ども、友達や担任とコミュニケーションがとりにくい子ども等々、様々な子どもがいます。このような子どもに対して、これまで家庭や学校で様々な手立てを講じていらっしやっただのに、本人に変容が見られず困ってしまっている方も多いのではないでしょうか。

そのような場合、私たち訪問教育相談員を活用されるのはいかがでしょう。保護者や学校と連携する中で本人に寄り添った支援をさせていただきます。少しずつ変わっていく子どもの姿を見届けられるよう取り組みます。

また、正式訪問は少し不安だと思われる場合には、「お試し訪問」制度もあります。担当が1～2回、家庭を訪問して本人と過ごしてみるというものです。

このような訪問教育相談を活用されたい場合は、学校と保護者でご相談くださるようお願いいたします。



特別支援教育サポートセンター



特別支援教育サポートセンターは、特別支援教育の理解と推進を主たる目的として活動しています。その目的を踏まえ、①困っている子どもへの支援活動、②学校関係者などへの研修活動、③特別支援教育に関わる調査研究などを行っています。

中心となる活動は、困っている子どもへの支援活動です。保護者、学校から依頼を受けて支援を始めます。初めに、学校訪問や、保護者、学校側からの聞き取りにより子どもの様子を把握します。必要に応じて、より妥当性の高い支援を構築するために発達検査などを行います。

その後、保護者、学校側へ具体的な支援を提案します。子どもが何に困っているのかの理解促進、支援を行う際のグッズやその扱い方、学校における日常的な対応の仕方、授業づくり、教室の環境設定、家庭におけるかかわり方など、その内容は様々です。そして、個別の諸計画の適切な運用を促します。必要に応じて関係機関との支援会議に参加することもあります。

子どもが何に困っているのかを大切にしながら、子どもの思いとかかわる方々が抱える思いの隔たりを少なくし、皆様の笑顔が増えるよう取り組んでいます。